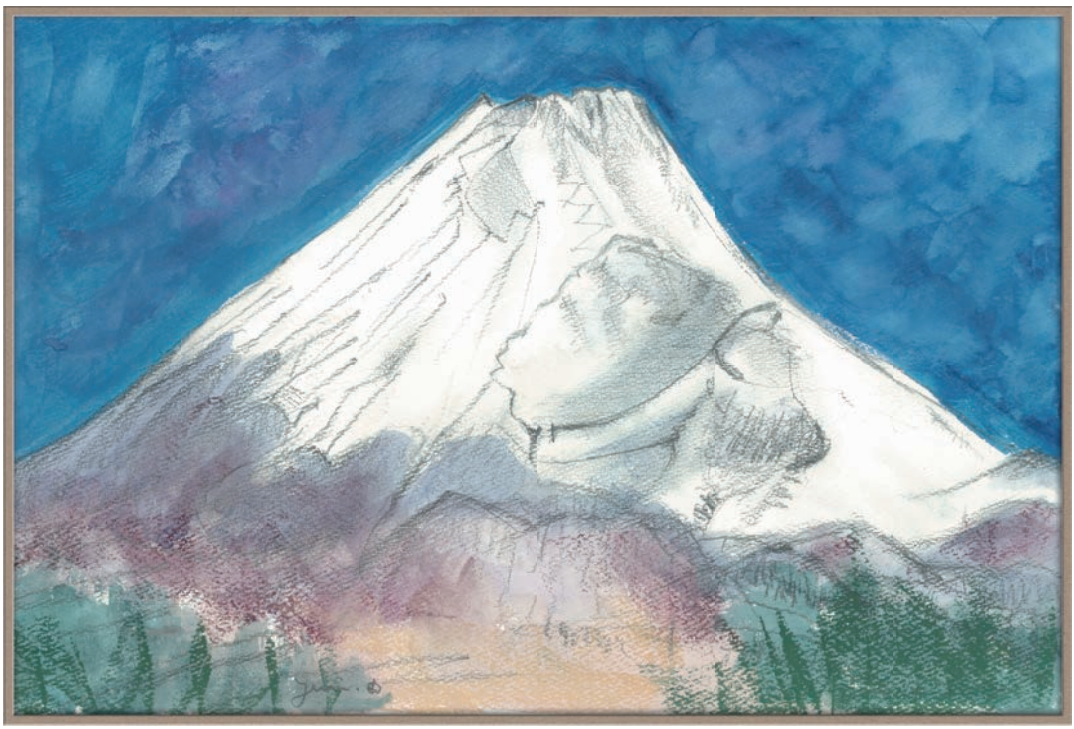
# 三河アララギ

平成三十年　2018年

三　月　号

第六十五巻　第三号



## ニューヨーク日記（137）

http://blueshoe.copetin.com/

**BlueCat, Shoe Lady**

# Blue Shoe Diaries

今夜オペラを観て来ました！蝶々夫人。オペラは見慣れていないけど面白かった。日本が舞台のストーリーをイタリア語で聞くのも何か面白い。舞台衣装もなるほど発想が違うな～って思ったよ。国旗の簪には笑ってしまったけど。良い感じにバランスの取れていると～ってもドラマチックな舞台で、これがオペラなんだな～って思いました。

We went to see an opera tonite! Madama Butterlfy. It was good, even though I hardly know anything about opera. It was funny to see a story based in Japan in Italian. And very interesting to see a western approach to the costumes. (flags as hair ornament!!) But I think it all works somehow.

# 目次

## 第六十五巻第三号（通巻七七一号）


表紙・富士山　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(137)　Blue Shoe（2）
黄素馨の門　御津　磯夫（4）
三河アララギ歌集Ⅶ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々　今泉　米子（6）
三河アララギ歌集Ⅶ　河原　静誠（7）
朝の五井山　岡本八千代（8）
千手観音菩薩　今泉　由利（10）
白菊　弓谷　久子（11）
アロエ　内藤　志げ（12）
氏神　安藤　和代（13）
八王子神社　清澤　範子（14）
今年も続く　伊藤　忠男（15）
一陽来復　森岡　陽子（16）
伊良湖　白井　信昭（17）
お福分け　阿部　淑子（18）
歳明けて　足立　晴代（19）
「老いの夢」　杉浦恵美子（20）
ほのかなる　山口千恵子（21）
春を待つ　夏目　勝弘（22）
歌集「夢のつづき」　水上　信子（23）
『ことよせ』　いーはとぶ　石田　文子（24）
森　厚子（24）

山﨑　俊子（24）
三田美奈子（24）
水野　絹子（24）
牧原　規惠（25）
稲吉　友江（25）
鈴木美耶子（25）
吉見　幸子（25）
牧原　正枝（25）

現代学生百人一首　東洋大学
神戸　拓真（26）
本多　怜（26）
篠宮　健吾（26）
丸尾　司（26）
渡邉　泰斗（27）
岡上　桃子（27）
本田　莉子（27）
関　結月（27）

御津磯夫短歌鑑賞3　鮫島　満（28）
萬葉秀歌の鑑賞　津之地直一（29）
童謡「青い空はいつもある」　高橋　育郎（30）

『俳句』　今泉　由利（32）
柳田　晧一（32）
山迫　京子（32）

森岡　陽子（33）
山元　正規（33）
田中　清秀（33）
浜田　紀政（34）
松本　周二（34）
今泉　如雲（35）
植村　公女（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）

かさね吟行会
『酔いの徒然』(71)　大橋　望彦（40）
ある自然科学者の手記(70)　江上　浩二（42）
「江上浩二の独り言」　今泉　雅勝（44）
絹の話(88)　山本紀久雄（46）
楽しい時間(64)　平井　茂行（48）
漢詩研修（十七）
『歴代天皇御製歌』（八十六）　貫名海屋資料館（50）
土偶（4）　夏目　勝弘（54）
「氷魚」のことから(206)　岡本八千代（55）
みなさまへ⑨⑩　磯辺　耐（56）
編集室だより（二〇一八年一月）　三河アララギ（58）
野菜・まんだら（1）　森岡・今泉（59）
「三河アララギ」について　（60）

## 黄素馨の門（昭和四十一年～昭和四十四年）　御津磯夫

あらはれて巖立つ丘船岡の阿賀の祠にまづ手を洗ふ
雄雉子撃たれて人の腰にあり冬草青き蒲生野にして
丘の上の阿賀の御神のまもらせる岩秀に彫りていまよりのこす
茜さす紫草たえし標野ゆき妹とひそみて食ふにぎり飯
岩蔭の冬の楛につまと割る飯はこのよのものとましろき
たたみまた披げもちつつ蒲生野のあたりの地図の折目ほころぶ
紫草をもとめいくたび過ぎましきわがけふの野に冬なびく麦
みたたしの野の上の丘と越えてゆくあるひはみ袖振りしあととも
走り水はたや渉らむ注意してそひつつ歩む町のはづれまで
日がへりの旅にのこれる古の石いくつ見て年にやすらふ

# 三河アララギ歌集Ⅶ

大須賀寿恵

もくろみは布団を干さむことなれどわくわくとして早く起きたり

じめじめと鉄平石に雨ふりて翅たたみをりしじみ蝶ひとつ

鍋の湯にをどりつつゐて鳴門わかめみるみる緑にふくらみてゆく

浅漬の胡瓜かみつつ奥の歯の健やかなるを吾はたのしむ

水運び来たれる如雨露に入れて帰るけさ収穫の曲れる胡瓜

樋つたふ雨だれの音は一分ばかりひでり続きの雨通りすぐ

竹の杖つきて護岸の階くだるわれに鴨らの翔びたちにけり

よたよたと川敷歩みてかいつぶりの六羽は次々に流れに入りゆく

ゆゑのなき涙湧きくる朝なり炎をあげて紙屑を燃す

松葉画廊に友の花の画を観にゆかむ幾年振りに草履をはきて

## 歌集「續草々」

今泉米子

思ふこと今日いさぎよし一本の高き白樺散りつくしたり

話おかむと心待ちをり手の上がる楓もみぢの紅葉してゆく

まてばしひの太き枝々拂はれて冬の日あかるき萩原神社

御陣屋のわが屋敷より移されし荏柄天神のみ扉ひらく

わが祖にしたしみおもふこまやかなる木蓮格子の神の御祠

この年の終りゆきつつ奥利根の月夜野林檎甘く匂へり

散り敷ける上に散りつづく寒椿赫々と空気染りて

夏暑き國より飛び来てくれなゐの寒椿に遊ぶわが稚子は

年々にわれに変るなき仕事また新しき年となりつつ

水仙に寒菊束ね冬青き羊歯の一葉を添ふるをさなご

# 三河アララギ歌集Ⅶ

河原静誠

守本尊の不動明王を覗き見る根付の小さきひさごの中に
お正当の日の間近なる日曜日に微笑大師を洗ひ浄むる
赤の黄の紙風車を手わたしぬ微笑大師の参詣の人に
さらさらと音をたてつつ二百余の紙風車廻る今朝の本堂
甘茶煮る甘き香のたちこむる四月八日よ吾の厨は
園児等に産湯の甘茶を注がしむ青竹の小さき柄杓に汲みて
竹林の騒ぐ細道登り来て宗学の講習にわれも加はる
姉弟子と住生の事論づる夢より覚む夜香木甘く匂ふ小床に
園児等が三抱へにする老樫はうつろとなりてなほ茂り立つ
さらさらと音をたてつつ老樫の春の落葉は境内を舞ふ

## 朝の五井山

蒲郡　岡本八千代

遠天（をんてん）を流るる雲の一つ大きそのふちのみの銀に光れり

あかときの五井山にけふの初日の出静かにさし来この病室にも

五井山に初日の出さし山膚はいつしか淡きむらさきの色

夫の手をわが頬に当て暖めをり君の血圧計は0（ゼロ）となりつつ

死に近き夫（をっと）と二人きりとなり君の耳もとに「お父さん大好き」

今もなほ深（み）空の雲のふち輝く「お父さん今はいづくか何処にか」

きのふまで夫は殿様と言ひゐしにはや殿様はどこにもゐない

今朝もまた人間の別離の不可思議を感じてをりぬ下女たりしわたくし

春の水けさも冷たし冷たきまま君の遺影に捧げおきたり

春の水けさも冷たしこの水を遺影の君にも捧げて拝(をろが)む

ふはふはの暖かき肩掛けそっと掛けてくれて帰りぬわが娘(こ)のひとりは

新しき年の三日月出でてきぬやはり眉型の光りの美しさ

今はただわが行く末も思はざり淡々としてまたあるがままに

西浦にも雪が積りて斑(はだれ)となりその径ゆっくり歩きてゆくわれ

また今朝もはだれ雪庭に舞ひてをりひとりぼっちのメダカ見に出づ

## 千手観音菩薩

東京　今泉由利

千のみ手に抱きくださる心地して千手観音菩薩のみ前

千の手と千の眼（まなこ）をもたれゐる観音菩薩を彫りし仏師を

いまだ蕾その手に持して咲き満つる蓮華台座に坐してをられる

寝食を忘れ書写されしとふ弘法大師の聖教目追ふ

空海の書写せしとふ教典の漢字のなかに梵字の混じる

家中の明りを消して音消して月の光を私に招く

遮るは何物も無し満月の月の光りに文字書きてゐる

南東の出窓にゆっくりのぼり来しまんまる月の月の光りよ

私の住みゐる地球の影にしてわずかわずかに欠ける満月

太陽と地球と月との次第にていま皆既月食進行中

# 白菊

豊川　弓谷久子

子も孫も空も大地も平穏な年にてあれよと心に念ず

白菊を供華にと供ふる正月に夫逝きてより二十一年

黒表紙に金の横文字ダイアリー我が足跡が並ぶ本棚

ボールペン十本買えると子が言ひぬ福引当たる千円なれど

「元気よ」と受話器の中の弾む声久びさに聞くまさ子さんの声

手作りのバック送らむと思ひたつ東京暮らしのまさ子さん達に

バケツの中の氷は終日厚きまま淡雪はやばや消えてゆきたり

大雪に大混雑の都心のニュース東京暮らしの君を案ずる

着てくれる人があると信じつつ半天縫ひ上ぐ三日かかりて

半世紀ぶりの寒波をとりどりの色にパンジー咲き続けをり

# アロエ

豊川　内藤志げ

法事終え佛壇の前の座布団は声の嗄れたわが念佛を
アロエの液始めて二十風邪にも罹ずアロエを探す
呼び止めてアロエを呉れたる松下さん風邪の予防に蜂蜜漬にと
さっそくに裁ち鋏にてアロエを刻む蜂蜜の瓶に詰めこむ
ぬくき朝赤石の峰に霞のかる今日は静かなひと日とならむ
氏神様の門松用にと大葉牡丹種より育て白揃ふ
花好きの友に最後の声かける赤白揃いみな片付きたり
寝る前にアロエの液を少しだけふふみて飲みぬ風邪の予防に
厚き扉の隙間より見ゆ百円玉小指の先にて見えなくなるまで
運転の免許更新止めにせよ厳しき顔にて二男は直向う

# 氏神

豊川　安藤和代

氏神に高きは望まずこのままの暮らし続くを願う元旦
孫子等の集う新春カニがいいすき焼きがいい厨賑やか
庭石がぬれているから雨と知る静かな午後の冬の雨です
音高くドクターヘリが西へ行く無事を祈りぬ冬の夕焼け
吾が歌を読みいてくれし友いれば今月の歌もおろそかならず
子には子の孫には孫の暮しあり温きスープを夫と分け合う
副作用ムーフェイスは悲しくも朝の鏡に淡き紅ひく
冬の野は尚広びろと人も見ず重き雪雲抱き静もる
夫と行く旅行は夢のまた夢かもう一度来よ沖縄の旅
花ことば幸福と言うポピー蒔くさらさらさらと春待つ庭に

## 八王子神社

春日井　清澤範子

三河アララギ新年号今日届きたり新年迎ふる準備整ふ
八王子神社の舞台に腰降ろす木立を巡る小鳥は何鳥
耐へがたき重き心に忍び泣く涙を風呂に流し癒やすも
立ち振るまい難しく感ずる今にして介護保険の申請をする
循環バスにて介護保険の申請に夫と並びて市役所に来ぬ
待ち遠しく介護保険の決定を待てば「支援Ⅰ」と書留を受く
認定の調査員は茶を断わり夫の生年月日氏名を聞きぬ
肩並べ病院へ行くバスに乗る夫と旅する思ひなどして
吾歩む時はやさしく手を引きてくるる娘の手は温かい
麹にて甘酒作るも久し振り冷やして飲むなり家族の団欒

# 今年も続く

大阪　伊藤忠男

巻く風に戯れるごと砂の舞海山空地視界遮る

御来光待ちて砂浜腰下ろす耳掠めるは西風の音

果てしなく続く砂浜霞む海我を何処に導くのやら

海と空陸の境目果てしなく続くこの道遠州と言う

年初め常と変わらね夜明けとて襟をただすはこの日この時

見事なりと言えば軽きか初日の出言葉失うその輝きに

１８０度遮ぎるは無き砂浜に一人立ちたるここ地球なり

海原に煌めく光まぶしかり白波祝う年の始めを

肌を射す風に砂舞う表浜潮騒き手指かじかむ

老松の和菓子崩すを躊躇する羽二重餅に物語あり

# 一陽来復

東京　森岡陽子

冬至の日一陽来復御守を吉方に向け夜半に貼りぬ

暮れ近き古い手帳に文字並ぶ季節季節の短歌の草案

梅の枝雀並んで日差しさし元旦の声昨日と変はる

年賀状これで最後にいたします一筆書れて友が気掛り

命名を受け承りしななそ前神田明神初詣に行く

千両と南天と松の飾り花赤い実落つる浅い水盤

去年今年甲申様の帝釈天縁の生れて七回目詣

お洒落してしのぎ寒風初芝居押し絵羽子板華やかに迎ふ

山茶花のこぼれる花びら光りつつ御地蔵様の頭も花びら

大寒の何処どこ迄も澄む夜空カーテンの隙間に覗くはそっと

# 伊良湖

豊川　白井信昭

み社の楠の落ち葉は軽軽と吹き寄せらるる千年碑あたり

楠木と銀杏（いちょう）の落ち葉入り混じり緑と黄の絨緞（じゅうたん）のやふ

元旦の朝寝してをり二階部屋柔らかく日は差し込みゐたり

紫に野牡丹の花年を越しなほ咲かむかと蕾は数多

年明けの伊良湖ビューホテル今し着く家族四人の再びにして

海側のロビーの大き窓にして伊良湖の遠く伊勢の山並

見晴るかす伊良湖水道ま近にも何かが違う年明けの海

見おろせる恋路ヶ浜の眺めなり午後のバイキングゆっくりと過ぎ

前芝の灯明台（とうみょうだい）は豊川の河口ここに始むる寛文九年

灯明台去年（こぞ）の台風に傷みつついつしか元に直りてありぬ

## お福分け

横浜　阿部淑子

荷をほどき豆ちりばめし寒餅を心踊らせお福分けする

二百余（よ）の人体の骨多忙なり若さ保つは骨のお陰と

車椅子で特別席に誘（いざな）われオケの響きに夫の目輝く

暖房に恵まれし床の猫柳立春待たでふわふわ綿毛

風雪の苦悩尾に耐えて芽吹きたる木々の姿に授かる力

# 歳明けて

東京　足立晴代

雪の空寒々として冷ややかにほころび初めし花あわれなり
積む雪咲きたる花も埋もれて健気に春を待ち望むなり
やわらかな春の陽あびる時待ちてみなぎる力あふれむばかり
新しき歳を迎えて過ぎし日々想い出深く心に残り
歳明けて寿ぐ朝は清らかに代々に明るさ続くを望む
古きとし羽つく音に正月と思う昔を恋しくありや
外国（とつくに）へ旅立つ鶴（つる）のたくましく優雅な姿美しきかな
初春を迎えし日々も束（つか）の間に早や節分の豆まき恵方巻
高き空凧（たこ）あがりゆく風うけてあがれ〳〵天まであがれ
大寒も去りて大雪日本中未曽有の積雪てんやわんや

## 「老いの夢」

蒲郡　杉浦恵美子

先頃にお目文字せしは何時ならむふとそんなこと思ひ浮かべり
幾度も通ひ慣れたるお宅なれど弔問せむに引戸の重さよ
去年の秋「老いの夢」てふ絵を見たりその瑞々しさに驚きしものを
「潮凪」と「老いの夢」二作の前に立ちいかほど活力戴きしことか
弔問を終へて辞去せば小寒の黄昏ほのかに明るさ残る
啓子ちゃんと蛇苺食べ親達を慌てさせたる幼時ありけり
瞬間にまざまざ浮かぶ忘れ居し六十年も昔の思ひ出
道端のくさむら映ゆる蛇苺競ひて摘みしか幼き我ら
深溝を通過する度思ひ居り祖母が最初に嫁入りし里
夫は戦死幼子ひとり居しと聞くその余を祖母は何も言はざり

# ほのかなる

豊川　山口千恵子

しとしとと夜半になりても止まぬ雨目ざめて聞きをり寒に降る雨

ほのかなる甘さに心ほぐれゆく友のもたらせし菓子「黒奴」

蠟梅の黄色ほのかに香りつつ小枝ひと枝小瓶に加える

十二円の切手貼り足し出さむかな絵はがき一枚励ましのたより

垣根よりすばやく飛びゆく目白一羽そのあと追ひてすぐとぶ一羽

色淡き口紅ひとつ買ひてみる久しぶりなり今日の日射しは

日だまりのガラスの鉢の目高たち春まで命保ちゐるべし

飛行機雲天空に三本くつきりとその一本は高くのびゆく

冬になりダチュラ根本より切り取りぬ水につけをくやがて芽出さむ

ミセバヤの根本の土をさぐり見る小さき芽生えの見ゆるを確かむ

# 春を待つ

豊川　夏目勝弘

散歩する道に一本の山桜さい細の枝の艶めくを見る
杉花粉をたっぷり含みて重重し花粉症には罹らずになる
竹藪を波だてわたる風の音地中の竹の子いまか今かと
縄文の人等の主食の一つなりナラの若木は枯葉を落とさず
川沿を吹きすぐ風に飛ばされし帽子が舟なし流れて行きぬ
いち早く白き花咲く木蓮のその枝枝に銀なす花芽
寂寂の冬を彩る赤と白と花の満ちみつ春はまださき
春を待つ己れの準備は何ならむ日中（ひなか）本読み日没にて寝る
先ざきの事など思ふも詮方無しカレンダーに予定を書きたす
つつが無く新年を迎へ門松を取り去りうららの日射しを待つ

# 歌集「夢のつづき」

水上信子

新しき檜皮葺き屋根空に映え出雲大社は静謐の中

老いの身に叶う願いを念じつつ二礼四拍大社の習いを

願い事一段ごとに叶うかに思いつつ登る讃岐金比羅

初夢に遠くに在りし人の来て旅のホテルの闇に目覚めぬ

目覚めたる体に残る甘やかな記憶抱きて身じろぎもせず

チンチンと発車合図も長閑なり路面電車はレトロに走る

冬日射す路面電車に揺られつつまどろみつつ行く三ノ輪橋まで

まだ固き蕾ちりばめ梅の枝は幾何学模様を空に描けり

山々は浅き緑に煙立ち今し目覚めの時は到りぬ

山の幸緑の恵み旬の味てんぷら和え物ともにうまかり

# 『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

老ふたり足の短い犬つれて師走の街角急ぎて過ぎる　石田文子
「ママママ」と後を追ひつつ日々暮れる曾孫の声は我が家の音なり
「クリスマスの約束」をきく聖夜ふけてなつかしき歌にうるむ吾かな　森厚子
蘆山寺の桔梗のなごりも紅葉も源氏の君につながる思ひ
今しがた茜に染まり陽は海に振りかえ見ればはや白き月　山﨑俊子
猫もをりしクローゼットに寝転びぬ暮れゆくなかの我の隠処に
岩の名の「蓬来の島」を拝みたりけふ訪ひし龍漂寺の庭　三田美奈子
恙無く老いしはらから父さんの二十三回忌に揃ひてにぎやか
病棟の窓より眺むる桜葉の散りゆく赤の転がりてゆく　水野絹子
春日社の通りの銀杏はや散りて残り二年の平成のゆく

晴れの日に雅楽の調べに導かれ境内歩む若僧の夫婦（めおと）
盆正月予定の有りて孫六人ぢーぢばーばの家には来たらず

**牧原規恵**

枯葉（わくらば）の紅きも載せて巴川流れゆくなり行方は知らず
娘より子の授かりし知らせあり今宵かがやく立待の月

**稲吉友江**

暮れてゆく早やけふの一日バスの旅京都の街よさやうならまた
河口湖に宿りゐる夫よ輝けるこの月影を見てをりますか

**鈴木美耶子**

お台場へ幼らと出かけサイエンス「プログラミング」我に見せたり
炉開きに炭火のぬくもり広ごりて茶室清めし霜月の稽古

**吉見幸子**

ゆか剥れ三和土（たたき）に竈跡（くど）そこに在りひんやり湿るこの土間に佇つ
しばらくは横に並びて食事する我が視野に外るる左側の人

**牧原正枝**

# 現代学生百人一首

## 東洋大学

等差でも等比ですらもないけれどあなたとわたしは調和数列

東京都農業大学第一高等学校三年　神戸拓真（かんべたくま）

寒そうに「いってらっしゃい」言う祖母を思って少しかけ足になる

東京都東洋大学一年　本多怜（ほんだれい）

百メートル真っ赤なトラック決闘場十一秒間無心で走る

慶応義塾普通部二年（神奈川県）　篠宮健吾（しのみやけんご）

大会が始まるたびに背番号数字一つが全てを語る

慶応義塾普通部三年（神奈川県）　丸尾司（まるおつかさ）

責任の所在をいくら探しても豊洲の地下は空洞のまま

**慶応義塾普通部二年（神奈川県）　渡邉泰斗（わたなべたいと）**

菜の花の花を食べたら苦かったまるでその味春みたいだね

**神奈川大学附属中学校三年　岡上桃子（おかがみももこ）**

行く時と帰りに通る同じ道景色が変わる合格発表

**捜真女学校中学部一年（神奈川県）　本田莉子（ほんだりこ）**

くるくるとコーヒーカップに回されて起点を探す高一の夏

**中央大学附属横浜高等学校一年（神奈川県）　関結月（せきゆづき）**

# 御津磯夫短歌鑑賞　3

「月虹」　鮫島　満

**見失ひて居りし鋏が自流泉三日月湖にての頁より出づ**

**『陀兜』　昭和三十四年**

書名や題名を表すかぎ括弧が省略されているのでまずそれを明らかにしたい。

「自流泉」は土屋文明の九番目の歌集名である。「三日月湖にて」はこの歌集所収の題名の一つである。

歌集『自流泉』は昭和二十二年から二十六年までの作品を収める。この前の歌集『山下水』の絶唱「川戸雑詠」一～十二に続き『自流泉』では「続川戸雑詠」一～十二と「続川戸雑詠・終」をも収める。「三日月湖にて」は昭和二十二年作の一連二十首の題名そのままである。二十五年作に「再び三日月湖にて」七首があるが、右の歌では二十二年の一連を指していると考えていい。

右の歌は昭和三十四年の作で、『自流泉』が刊行された昭和二十七年の何年後にその鋏は行方不明になっていたのだろうかと想像を刺激される。また、栞代わりに歌集に挟んだ鋏とはどのようなものだったのか。作者は医師であるからかなり細いものも手元にあったはずだとの思いをそそられる。

想像はさらに、作者は「三日月湖にて」二十首中のどの歌に特に惹かれたのであろうかということに及ぶが、これはとても推定することはできない。二十首中には、

わが恋ふる人もはるかに思ほえてただ明るき春の夕べのあかり

ガラス戸の中より春の山を見る若葉に映る花のむらさき

うみ湖ぞひにはやきねむり眠の目をあきて槻にのこれる夕べのあかり

白き花やや朽ちがたのひとつ木は今朝こぞり立つ青葉のひかり

など、敗戦後の国を思うつらさや飢えんばかりの苦しみから立ち直りつつあることを思わせる歌がある。

軍医として戦地に赴いた磯夫にしても胸を打たれたに違いないと思うのである。

# 萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

**ありつつも君をば待たむうち靡く吾が黒髪に霜の置くまでに**

**在管裳　君乎者将待　打靡　吾黒髪爾　霜乃置萬代日**

**（②八七、磐姫皇后）**

**（口訳）**いつまでもこうして君のおいでをお待ち申しましょう。なよなよと長くなびく私の黒髪が白くなる時までも。

この歌も八八の歌の次に「或本歌」としてあげている「居明して君をば待たむぬばたまの吾が黒髪に霜はふるとも」（八九）の伝誦歌と見られる。即ちここでも、起きたまま夜を明かしての意の「居明して」が、このまま変らずにの意の「ありつつも」に変り、或る夜を通して、又はこれから幾年月をこのままにの意となつているのである。又八九では実際の霜であるのが口訳に示した如く「黒い髪が白くなるまで」長い年月を」の意で「霜」は譬喩として使われているのである。真淵が黒髪の白くなることを霜に譬える事は上つ代にはないと言つた非難は、題詞をそのまま信用した上での事であり、これを伝誦歌として仮託の作と考えれば問題はないのである。

**秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何時辺の方に我が恋やまむ**

**秋田之　穂上爾霧相　朝霞　何時辺乃方二　我恋将息**

**（②八八、磐姫皇后）**

**（口訳）**秋の田の稲穂の上にかかつている朝霧はいつかはどこかに消えて晴れて行くが、そのように私のこの晴れない胸の思いは一体いつどこへ消えて行くのであろうか。

上三句の内容は譬喩的に自分の恋情を表わす大切な働きをして居り、その続き方は序詞的である。稲田の上にかかる霧を見つめての作とまでは考えられなくとも、なおこの表現には的確な写生の眼が感じとられる。第四句を「何処辺の方」と単に場所的意にとる説が多いが原文は「何時辺乃方」でその「何時」は集中五十余例「イツ」と訓んだ例なく、常に「イツ」であり、ここも「何時」と訓んでそれは時間的に、「辺の方」は場所的に見る説に従いたい。なお、後世になると霞と言えば春のもの、霧と言えば秋のものときまつて來るが、ここでは秋に朝霞と言つてまだ固定していない。茂吉は秀歌で「この歌は、磐姫皇后の御歌とすると、もつと古調なるべきであるが、恋歌としては、読人不知の民謡歌に近いところがある。併し万葉編輯当時は皇后の御歌といふ言伝へを素直に受納れて疑はなかつたのであらう」とこの歌の伝誦歌である性質に言及して居る。

# 童謡「青い空は　いつもある」

髙橋育郎作

青い空は　いつもある
曇りの日には　見えないけれど
青い空は　あるんだよ
夢と希望が　あふれてる
だから信じよう
明るいあしたが　あることを

青い空は　いつもある
嵐や雪の日　みえないけれど
青い空は　あるんだよ
やさしい笑顔が　いっぱいだ
だから飛び立とう
そして勇気を　つかまえよう

だれだって　不安はあるよ
悩むときだって　あるだろう
でも　うちひしがれて　立ちなおれなかったら
あまりにも悲しすぎるね

だれでも一人では生きられないよ
だから　さしだす手と手が　支えになるんだ
キミよ　ぼくらといっしょに
あの空へ　飛び立とう

青い空は　幸せ色だ
孤独なんかに　負けないで
幸せ色に染まったら
元気になって　戻ってこようよ

ララララ　ララララ
青い空は　いつもある

# 『俳句』

ひと粒にひとつ太陽実万両
冬籠りバランスボールに揺られゐる
マスクして人格消して足ばやに

**今泉由利**

肩甲骨を寄せ深呼吸春隣
雪掻やただひたすらに黙しをり
松過ぎてゆつくり歩く神社かな

**柳田晧一**

一年を壁に吊して初暦
加はりて雪掻く人になりにけり
山鳩の番はばたく春隣

**山迫京子**

一瞬のしじまを挟む虎落笛
北風に向かふ木立の力満ち
探梅に一輪開く真白かな

**森岡陽子**

春近し百葉箱の鎧窓
濡縁の緩みたる釘春隣
舟宿の潮の香りの隙間風

**山元正規**

若水の墨の色濃き夢の文字
朝日照るビルの白さや春近し
胸ボタンひとつ外す春隣

**田中清秀**

初詣娘に渡す守札
旅倦んで冬雲続く車窓かな
雪明り絵画のごとし吾狭庭

**浜田紀政**

篝火の温みを頬に初詣
一天を拭ひて明かき冬の星
足裏にも大地のゆるみ春隣

**松本周二**

青木の実葉陰にゆかし紅の艶
寒早り心地良く聴く雨の音
初春の空にスーパームーンかな

**重野善恵**

旭富士阿武咲出し町に雪

雪沓で津軽を発ちて江戸は晴れ
さらさらの雪はらはらと降りにけり

**今泉如雲**

書道展終え銀座の冬紅葉

棒読みの百人一首三日かな

**植村公女**

幾たびも窓開けてゐし春の雪

# かさね吟行会
## 「大國魂神社」　一月

田中清秀

引いた御神籤は大吉だった、これは春から縁起が良い。今年初めての吟行会は府中にある大國魂（おおくにたま）神社に初詣を兼ねて実施した。平成三十年一月十二日晴天、大鳥居の前に集合した後、早速に参道を進み参拝を済ませる。既に松の内は明けているが初詣の参拝客なのか意外に賑わっていた。

大國魂神社の創建は西暦百十一年と言われているので約一千九百年も前になる。その後、武蔵国府がこの地に置かれたことから武蔵国中にある神社をここに集めてお祀りした。さらに鎌倉時代に北条・足利の両氏や江戸時代には徳川家康も篤く崇敬したと言われ、格式と歴史のある東京を代表する総社である。総社とは主要な神々をすべて集めて祀る神社のことで、ここにお参りするとその地方の全ての神社にお参りしたことになる。また、毎年五月五日の例大祭は夜間に八基の神輿が御旅所に渡御する俗に府中の「闇夜（くらやみ）祭」と言われ関東三大奇祭の一つで多くの人が集まり盛大に行われる。

**神木の紙垂の白さや寒日和**　正規
**悴んで濡らす指先御神水**　清秀
**手水舎の彫刻あまた梅早し**　さち子

大鳥居からは天然記念物の欅並木の広い参道が続き、さらに随神門から入ると中雀門、拝殿、本殿へと続く。檜造りで美しい随神門の両脇には鶴石、亀石が厳かに置かれている。本殿は主祭神の大國魂大神が安置され一棟三殿の立派な建物である、その他に多くの摂社・末社が境内に配されている。また、本殿裏のご神木は樹齢千年の大銀杏でお参りすると産後の肥立ちが良くなると言われるパワースポットでもある。

**由緒見て気持ち新たに初詣**　紀政
**苔むして座せる狛犬春近し**　陽子
**狛犬の頭を撫でて初詣で**　皓一

境内には幾つもの狛犬が置かれているが巽神社の狛犬は愛らしい顔立ちで人気がある。また、アメノウズメ命を祀る宮之咩神社は芸能や舞楽の神様であると共に安産のご利益があることで知られ祈願の絵馬を奉納し無事願

いがかなった暁には、底の抜けた柄杓を奉納する風習があるらしい。松尾神社は酒造の神で酒造会社が菰樽を奉納している。住友神社は開運、商売繁盛、海上の守護神として振興されている。また、水神社では境内の地下深くからくみ上げられたご神水が頂ける。さすがに総社には八百万の神々が集まっているので神社巡りは霊験あらたかで且つ楽しい。

**冬うらら一角獣に逢ひにゆく　由利**
**神苑になに啄むや寒鴉　京子**
**朱柱の国府遺跡や春近し　れい子**

大國魂神社と旧甲州街道に挟まれた地区は奈良時代から平安時代にかけて武蔵国の国府が置かれていたことが昭和五十年以降の発掘調査で明らかになった。ここは国の史跡に指定されいる。国府の中心は国庁（こうちょう）で国司が政治や儀式を行う場所、その周辺の建物群を国衛（こくが）と言い行政事務を行っていた。国衛を囲んで役人の舘や兵士の宿舎、庶民の住宅などが四千軒余り有ったと言われ、政治・経済・文化の中心地である。現在、史跡整備を行い再現した柱跡に丹土で赤く塗布した柱を立てて目印としている。多くは埋め戻されているが構造展示館に柱の設置方法などミラーガラスで立体的に解説されている。国衛跡と大國魂神社の社叢は古代の人びとの豊かな賑わいを思い起こさせる。

定例の句会は近くのイタリアンレストランで昼食に引き続き行われた。いつものとおり嘱目三句四句選で参拝後の爽やかな気分の句が多かった。お神籤に「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」とあり、心を合わせて行うことの大切さが書いてあった。今年も皆で心を合わせて楽しい句会を続け、俳句の研鑽に励んで行きたいものである。

**■かさね吟行会■**

日時　三月九日（金）
場所　小石川植物園
集合　白山坂上側改札口　11時集合
　　都営地下鉄三田線
申込　森岡陽子宛 (03)３７１２・２８３５

# 『酔いの徒然』（七一）

丸山酔宵子

## 『原色のインドとタージ・マハル』

物心ついた頃から憧れていたタージ・マハルへの思いとともに、インドには一度は訪れたいと思っていたが、図らずもインド系米国友人子息の結婚式招待を受け、師走の日本を慌ただしく飛び出した。

友人子息及びお嫁さんはニューヨーク生まれではあるが、親類縁者へのお披露目のため、ヒンデュー教の伝統にのっとり、お嫁さんのルーツである古都ジェイプールでの3日3晩の豪華絢爛の挙式となったのである。インド特にヒンデュー教ではお嫁さん家族がお婿さんを迎えるのが基本で、挙式一切はお嫁さん家族がすべてを用意する。今回はジェイプールの最高級ホテル、メリディアンホテルを借り切って、初日はカジュアルスタイル、翌日はファミリーカジュアル、最終日はブラック・タイと民族衣装を交えての連日連夜、飲めや踊れのインド映画〝ボリウッド〟を彷彿させる、それは将にマハラジャの世界・・・。

５０００年の歴史を超えた悠久なる大地、混沌とした街並みと想像を絶する人々の様々な姿。ヒンデュー教、イスラム教、シーク教が混在し、牛が道路を闊歩し、自動車、三輪車、リクシャー（人力車）が我先にとひしめき合い、その合間を巧みに抜けていく。路地に入れば路上生活者や物乞い、野良犬たちが土色の赤茶けた景色として溶け込んでいる。

そんな昔ながらの原色の生活の姿を、昼間はラール・キラー、フマユーン廟、クトゥブ・ミナール等の世界遺産のスケールの大きさに驚愕し、夜はニューデリーの繁華街で洗練されたインド料理とインドビールとワインで、今のインドを肌で感じたのである。

夜の帳（とばり）がまだ明けきらない寒い早朝4時。ニューデリー駅から満員の特急電車で、一路夢のタージ・マハルのある古都アグラへ。世界に誇るタージ・マハルの玄関口とは思えない殺伐とした駅前で、おんぼろ車にリクシャーそしてここでも牛達が主役で鎮座し道路

を我が物顔で横切っている。未だ午前9時前とは言え、外国人も含め多くの入場者の長い列が続き、徹底したボディーチェックを受ける。暫く歩いていくと、朝日に白銀の輝きを放つ白亜の壮大な傑作が目の前に迫ってきたのだ。

ムガール帝国5代皇帝シャー・ジャハーが最愛の妻ムムタス・マハルの死に捧げた神秘的な霊廟で、22年の歳月をかけて建てられ、今から４８０年前の出来事とは言え、ムガール帝国皇帝の絶対的な権力とそれに答える民族の秀逸な能力と健気さに驚かされる。

ニューデリーの12月の夜はかなり冷え込んでくるが、昼は暑く、砂漠気候で湿気が少ない。つまりビールが最高に美味しく飲める必要十分条件を備えているのである。それも地元の〝KINGFISGER〟で・・・・・洗練されたうまさであります。

**物乞ひと牛が横切る去年今年**

**酔宵子**

# ある自然科学者の手記（70）

大橋望彦

## 『考える芸術』と『考えのない芸術』

落語と云う限り、落ちの無い落語では洒落（しゃれ）にならない。腑抜けで面白くないからである。その落ちにも「考え落ち」と言うのがある。落ちが中々判らないのである。それでも「何かある」と言うのが気掛かりとなり、どうしても考えてしまう。そして、翌日になって、「そうだ！」と落ちに気付いたりする。その途端「ワッハハ・・・・」なんだ、落ちはこれかと思い出し笑いとなる。結果的には落ちがあったのだ。もしこの「考え落ち」に気付かなかったならば、単なる「腑抜けな話」になってしまう。これは仕掛けが悪いのか、聴く方の感度が鈍いと言う問題なのか。明らかに後者なのだが、これは落語だからそれで済まされる面がある。然し、アーチストが何か作品の製作の上で、このような仕掛けを作ったとしたならば、どうなるのか。「考え落ちの芸術」と言うのがあるだろうか？アーチストは常に考えて「作品」を作っているとは限らない。感性と言う言葉があるが、余り正確には定義を知らないが、物事を感じる力のようなものだろう。「考えのない芸術」とは、この感性を磨くことにより思うがままに作品を作っていくうち、自然と芸術作品が出来上がってしまうようなものかもしれない。恐らく、「考える芸術」家からすれば、あり得ない事であろう。ところが、「考え落ちの芸術」はどうだろうか。アーチストは作品の評価が判って貰わなければ、何の価値も無い「単なるものづくり」に終わってしまう。「考え落ちの芸術」に仕掛けが難し過ぎると、誰も判らない。これでは価値が付けられない。よく芸術作品は作者が亡くなってから何年もしてその価値が出てくる、と言われる。これは『考え落ち』なのであろうか。芸術の価値論をここで述べるつもりは無いが、唯、甚だ難しい問題で、一概に結論を出せるものではない。このように「考える芸術」には幅広い範疇の世界があり、面倒くさいのも事実である。然し、「考える芸術」の基本として、先ず表現する為に必要とされるデザインは基より、感性も必要だがその他バランス感覚（八頭身とか、黄金分割とか、遠近法とか）や経験的各種技法、伝統的技法等の知識（考え方）が要求される。ところが「考えのない芸術」には、観る側の感性で決まってしまうものが立派にある。例えば、自然界が作り出す造形美である。自然界の、陸・海・空での物象の形態美を始めとして、綾なす色彩、光と影の美しさは今更言うまでも無い。そこで、アーチストは「この美しさ」を自分の表現力（先の基本を含め）の全てを尽くして、絵画・彫刻・写真・陶芸・工芸、更には書道・華道・服飾・調理・音楽等各種技法を凝らして再現しようと試みるのである。この叡智を集中した「考える芸術」では、自然界で一瞬にして到達しえた完璧な美しさを再現出来ずに、苦戦するのである。この事をゲーテが既に彼の「自然論(Die Natur)」の中で述べている。それは表わそうと思ってもその技法に一定の制約があるからだと弁解するであろ

うが、それは詭弁に等しい。「考える芸術」ではまだまだ「考えのない芸術」に先を越されているのだ。生物学者で有名な「個体発生は系統発生を繰り返す」と言う生物原理を提唱したエルンスト・ヘッケル（Prof. Ernst Haeckel）は、その著書「自然界に観られる造形美（Kunst Formen von Natur）」では、生物の作り出した精微な対称形の幾何学的文様（例えば放散虫の構造）を数多く示し、その驚嘆に値する多様性が、種として保存されることを精密に示した。これは明らかにアートの世界である。彼は立派な進化論学者であるが、この「美の進化」をどのように説明出来るのか。「美の淘汰（selection）」とはどんな機構に基づいているのかを知りたい。「考えのない芸術」は単なる偶然の芸術なのか。必然の芸術とはどんなものだろうか。わぁぁぁ・・・知りたいことが一杯出てきてしまった。

話を戻すと、「考えのない芸術」には観るものの感性を揺さぶる要素があるように思われるが、「考える芸術」にはそのような要素は少ないのであろうか。そのような事はなく、観るものの感性が変わらなければ、同じに映らなくてはならない。

そうは言っても、ここで結論を出すのは早いと思うが、どうやら芸術とは、考えることよりも感じることが優先するような気がしてきた。

それでなのかどうかは判らないが、自然の示す美をそのまま表現しようと思っても技法に限界を感じてきて、そのような具象的手法を放棄して、表現の技法として抽象的に自分の感じた美の表現法を新たに編み出してきた。絵画では、後期印象派と称せられる作風で感性の強調が始まり、それまでの極めて精巧な描写であったものが印象によりデフォルメされた作風に変化してくる。更に、抽象派と言われるピカソがその代表格にあるが、「美の根底にあるものを掴み出し、その感覚を抽象化して表現しようという試み」となる。これは感覚を考えざるを得ないであろう。「考える芸術の進化である」と言えるかナ。従来のデザイン感覚からは懸け離れた表現法に切り替わったのである。それはそのような作品を観る事から、観る側の感性にも進化が及んできた。感覚の抽象化が普遍的になってくるのである。今まで音楽鑑賞家が「クラシック以外は音楽でない」と言い切っていた人が、いつの間にか、「ジャズもいいね」と言い出すようなものである。そうなれば、もう「考える芸術」だの「考えのない芸術」だのと言う事も必要がなくなってしまう。これが先に述べた「芸術とは、考えることよりも感じることが優先する」と言った意味にも通じてくるのではないか。そのようなことが流行というものを生み出してきたように思う。これは商・工業デザインにおいて急速の進歩を遂げたのではないろうか。観る方の感覚を刺激する技法の発展とも解せられる。科学の極致に立って示される商・工業デザインから『考え』を除く事は最早不可能である。この事については何れそのうちに別に論じよう。流行を否定するのではないが、余り巻き込まれるのに好きになれない、流行遅れの親父がそこに居る。

扨、此の辺で、時間の無駄遣いを辞めましょう。

オワリ

# 「江上浩二の独り言」3

江　上　浩　二

## 無の数学的考察、非可換演算（Ⅱ）

昨年のある日突然電子メールが届き、非可換演算について教えてくれと知人に頼まれた。このような依頼、問いかけをされたことは未だ無かった。その知人の頼み事はもっと難しい数学的命題についても説明してくれというものだったが〝無〟とは関係なさそうなので、ここでは割愛する。

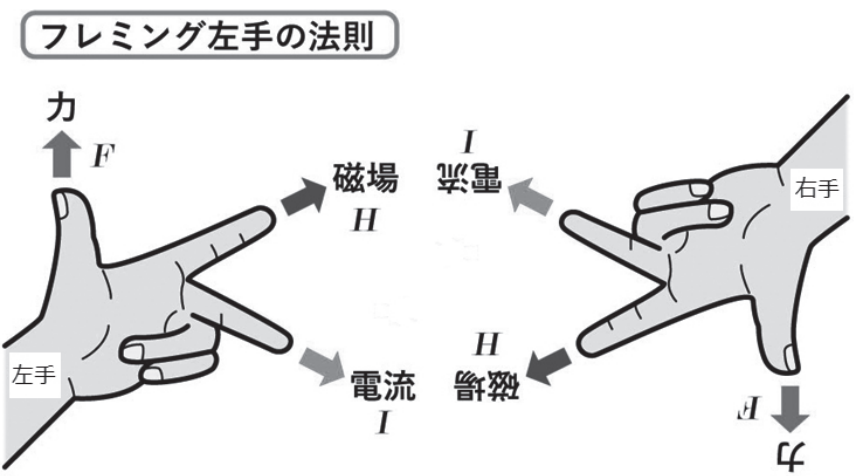
さて、掛け算・積では　例えば 2 x 10 = 10 x 2、a x b = b x a が成り立つが、次のようにaとbとを入れ替えると、ある演算子 * は $a^{*}b \neq b^{*}a$ と成り立たないものがある。それは非可換演算と呼ばれ、普通の方はそんな演算子 * の事例を説明できるだろうか。ここではそんな演算子 * を使って〝無〟にアプローチしようという試みである。ベクトルの世界で、内積とか外積と呼ばれている演算があり、その外積を引用してお話したい。心の無を、人という神経が張り巡らされている有機体が交感神経・副交感神経で制御され状態と考えると、私の実体験感覚では作用反作用の関係にある交感神経・副交感神経が先ずバランスが取れていることだけでなく、次にバランスが取れた交感神経・副交感神経の働き・活性も鎮め、小さくなった極限の状態であろうと思う。人の思考、言葉上の無を、電気的働きを媒体とする神経の電流と見立ててみる。

前で囁いた非可換演算のベクトルの外積 * であるが、生命体の神経網には実は電気が流れている。これを強引にフレミングの法則に当てはめる。一番初歩的な説明として電流a、磁界b、それから生ずる電磁力を考える。右巻きのコイルに電流の流れる大きさと、生ずる磁場と電磁力の方向、左巻きのコイルに電流の流れる大きさと方向で定まる磁場、電磁力を考えると、スカラー的絶対値の大きさ「ab」=「ba」は同じだが、ベルトルの向きが真

反対となり、電磁力の相互作用としては引き合い消失する。これを無とすると、ベクトル $a^{*}b$ ＋ ベクトル $b^{*}a$ ＝ 0 が数式表現となる。

意識の世界で人が脳を自ら御することが出来るか分からないが、首の側面にある筋をとおして、上部に位置する張りつめた脳を脱力させ、それとともに思考活性も眼を閉じ、闇の中で鎮まらせてみよう。儀式的合掌：手の平を合わせる、合わせないという物理的状態には拘らず、願わず無心に祈ること　に繋がっただろうか。

注　非可換演算やフレミングの法則の正しい専門的内容は wikipedia でネット検索して勉強されたい。



# 絹の話（88）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

## 「絹と日本刀」

### 絹の武装利用の始まり

中国、前漢（紀元前２００年頃）時代、モンゴル平原で勢力を著しく拡大していた匈奴の王、冒頓単于は南下する機会をうかがっていました。

漢王朝は外圧を回避するため、王族の婚姻政策や、匈奴の欲しがる、あわ、もち米、錦、緜絮（真綿）などを大量に送っていました。モンゴル高原は非常に寒いので真綿は錦以上の必需品であったようです。

その真綿は軽くて温かく、柔軟性があり、皮膚病などにもかかりにくく、羊毛フエルトの着衣より活動しやすく、人や蒙古馬の負担を軽減出来ることが分って来ました。

それを兵服に利用してみると、兵も馬も動きが機敏になり、しかも矢弾を防ぎ身を守る効果のある事に気づいたのです。この真綿フエルトの防弾性と活動性、親和的保温性が蒙古兵をしてユーウラシア大陸を制覇させた大きな要因となった事は間違いありません。

同じ頃ローマ帝国でもシルクロードを経てもたらされた緜衣を着て戦ったところ、敵の矢を防いだと伝えられています。

唐の時代には紙絮（絹の屑を漉いて作った物）を兵士に着せたところ強い矢も防げたという既述もあります。

また、明の時代の『涌幢小品』と云う書物には水を含ませて柔らかくした繭を木槌で打って紙のように薄くした物を三寸ほどの厚さに重ね合わせ、四方を鋲で打った綿甲で兵士の鎧冑を作れば矢が通らなく、濡れると更に強くなり、どんな鋭い箭も通らない、と記されています。

鉄が充分確保されるようになった清の時代になっても鎧の一種として、緜衣の上に菱形の鉄板を甲板状に配列し鋲で打留めした装飾と実用性を兼ねた武官鎧の一種が作られていたという記録があります。

日本でも奈良朝から平安朝にかけて「布甲の制」により兵士の簡易甲冑が真綿で大量に作られた経緯があります。

『続日本書紀』には五行説にならい、青地に朱、赤地に黄、黄地に青、白地に黒、黒地に白というように真綿（紙絮）の表地を五色に染め分け、対立色の鉄板をしき並べた様な模様を画いた綿甲冑を二万二千五十具太宰府で作り、東海、南海、西海などの節度使や兵士に供したと記されています。

事実、新羅討伐の為に諸国から動員された四万余の兵

士の武具として大量に生産されていたと思われます。遣唐使の舟にも万一の備えの為に、太宰府に備えられていた武具の中から「鎧甲百両、冑百口、袴四百腰」をさげ渡した記録があります。

当時、それを賄えるだけの繭の生産があった事がうかがえます。しかし平安中期以降の日本では鎧甲冑は作られなくなったようです。

## 蒙古襲来

鎌倉時代中期、度重なる元の使者惨殺した結果、文永の役（１２７４）弘安の役（１２８１）と云う二度にわたる元軍の襲来となって現れたのが蒙古襲来です。

この戦いに鎌倉武士団は思いもよらぬ苦戦を強いられたのです。それは火薬という新兵器と、鎧甲冑です。

特に鎧甲冑には、わけが分らないほど驚いたようでした。執権時宗の日記に「切れども切れず、射れども射れず」とあるように、当時の身幅広く、重ねを厚くした肉厚な長寸で反りの深い太刀では絹は切れなかったようで、射た弓矢もポロリと落ちてしまったようです。

また日本の戦法として、重厚な鎧冑に身を包み、鏑矢を射て戦闘開始を告げてから、大音声に名乗りをあげて、一騎闘戦の戦法では蒙古軍の軽装で臨機応変に軽快機敏に動き回る戦法にたちうち出来なかったようです。

さいわいにして台風襲来で難を逃れる事が出来ましたが、この教訓が、日本の鍛刀界に革命的変革をもたらす事になったのです。

## 日本刀の完成（絹の切れる刀）五郎正宗の名刀

蒙古襲来の教訓を生かして、絹が切れる刀を作る事が急務になりました。

青年刀匠五郎正宗は父の行光から秘法「山城伝」を受け継ぎ、蒙古兵の様子を聞き、厚い真綿の層を断ち切る事が出来、且つ固い甲冑に当たっても刃こぼれしなく、折れない刀づくりを目指しました。

それまでの太刀は柔らかい鉄を弱い火で焼き上げていたのですが、切れ味をよくするには鉄をよく鍛えねばなりません。その為には鉄を強く焼き、強く叩いて、急冷を繰り返し、折れたり曲がったりしないように芯に反鍛の硬度の低い芯鉄を固く鍛えた皮鉄で包んで更に鍛え、皮鉄は玉鋼の時の１／６、芯鉄は１／３になるまで鍛えたのです。また切れ味と反りの研究も進め、従来の太刀より緩い反りにして、軽量化にする為に重ねを薄くして、均衡のとれた実戦用の刀を完成させたのです。

絹が切れる刀、即ち日本刀の完成です。

蒙古襲来が五郎正宗をして日本刀を完成させたと言っても過言ではないでしょう。

# 楽しい時間　63

2018年1月30日

山本紀久雄

## 明治維新150年・・・その二

江戸無血開城によって日本の近代は歩み進み、今年は維新150年となった。

その無血開城の功績者は誰か。という議論になると、現在、圧倒的に「西郷隆盛と勝海舟による慶応4年3月14日の会見で決した」という説が流布され、史跡として港区田町駅近くの薩摩藩蔵屋敷跡に立っている。

東京都が運営する江戸東京博物館、JR総武線の両国駅近くにあり、徳川家康が江戸に入府してから約400年間を中心に、江戸東京の歴史と文化を実物資料や復元模型等を用いて紹介している。

館内には常設展として「江戸無血開城をめぐるおもな動き」も図示されている。これによると鉄舟の役割は海舟から「西郷への手紙を託され、駿府にて会談、海舟の手紙を渡す」とのみ書かれている。この文面からは鉄舟は単なるメッセンジャーに過ぎないわけで、これが江戸東京博物館の見解とわかる。

そこで、2016年10月に江戸東京博物館学芸員に対し、「全生庵で保存されている鉄舟直筆の『慶応戊辰三月駿府大総督府ニ於テ西郷隆盛氏ト談判筆記』には、西郷との交渉・談判の内容と、西郷から『慶喜の命保障』、『徳川の家名存続』の確約を引き出したことが明確に記され、その結果を江戸にて大久保一翁、海舟に報告し、慶喜が欣喜したと書かれている」これと江戸東京博物館の図示とはあまりに違い過ぎるのではないか、と問い合わせしたところ、次のような回答が届いた。

「『談判筆記』などの資料研究を深め（他の同時代資料とのつき合わせなど）、当館のパネルや展示に反映させていければと存じます」と。

2018年1月20日、読売新聞西部版に「維新」150年記事が掲載された。テーマは「江戸無血開城」で、筆者にも取材がありコメントしたが、江戸東京博物館学芸員も同新聞紙上で「私見史論」として次のように述べている。

《江戸無血開城は幕末維新史のハイライト。ドラマや映画で描かれるように勝と西郷が演じた役割は大きいが、2人だけで成し遂げられたわけではない。敵だらけの中、果敢に西郷との面会に赴いた山岡鉄舟や2人の御台所――薩摩藩出身の天璋院（篤姫）と皇族出身の静寛院宮（和宮）らがそれぞれの思惑で動いた結果、実現したことを忘れてはならない》

この掲載内容、異論が残るが、鉄舟を「勝の手紙を届ける単なるメッセンジャー役」という図示から、かなり変化している。認識転化させたのか。

現在、江戸東京博物館は「改修工事に伴う全館休館」（平成29年10月1日～平成30年3月31日）中であるが、改修後の図示でどう表現されるのか、それが大きな楽しみである。

2018年1月5日の産経新聞デジタル版に、岩下哲典氏（東洋大文学部史学科教授）が「知られざる『江戸無血開城』

勝海舟を凌ぐ幕末ヒーローはこの人だ！」を掲載した。

この中で岩下教授は、《「江戸無血開城」の幕府側の最大の功労者は、海舟では断じてない。山岡鉄舟である。そして二番目の功労者は、鉄舟の義兄、高橋泥舟である。海舟は三番手である。むろん、西郷は新政府側の最大の功労者であることは変わりがない。あえて言えば「江戸無血開城」の功労者は西郷と鉄舟・泥舟である。海舟は、徳川家の表向きの代表者として追認したにすぎない》

《「江戸無血開城」前夜の４月10日、慶喜は主だった幕臣を集めて別れを惜しんだ。その時、鉄舟に自らの助命と徳川家の存続、すなわち「江戸無血開城」に果たした役割は、鉄舟が「一番槍」であると称賛して愛刀を与えた（全生庵所蔵の断簡史料）。鉄舟・泥舟の苦労が報われた瞬間である》

《「江戸無血開城」の新政府側の功労者は確かに「西郷どん」である。徳川方の功労者は、鉄舟・泥舟・海舟・和宮の使者である。これまたあえて比率でいえば、西郷：鉄舟：泥舟：海舟：和宮の使者＝３：５：３：５：２：０：５：０：５であろう》上記見解を詳しく述べた『江戸無血開城の真実』（吉川弘文館）が近く出版されるという。これも大いに楽しみにしている。

このように明治維新150年を期して、これからも多くの歴史出版物が世間を賑わしていくだろう。それを大歓迎するが、その議論のすべて（といっても過言でない）が、武士階級としての支配者同士で争った事件・紛争・戦争をテーマに語られていて、一般民衆が時の政治事件を、どのように見ていたか、という視点からの問題提起はなく、仮にあったとしても埋もれている。

その最大の理由は、民衆は自身を語らず、史料も遺さないからである。個人史として遺せる人とは、それを書くことができた、または、時代の中で突出して登場する限られた人物、つまり、時の為政階級に位置する者たちで、これが「歴史上の人物」として登場し遺されていくのである。

したがって、これ等の人物を追い求め、考察し、研究し、著されるものが一般的な歴史書籍であるから、人口の94％を占める民衆心理が抜け落ちていくことになりやすく、往事の全体実態を過つ危険性があるだろう。

ところが民衆心理考察には史料がなく、あっても少なく、事実上不可能に近い。ならば、民衆集合心理の様相を描き出す嘶を創作し続け、人々に語り、受け入れられていた円朝作品の分析から考察可能ではないかと考えた。

この仮説で円朝作品を追及してみると、『蝦夷錦古郷の家土産』において元治元年（１８６４）３月の「天狗党の乱」を取り上げ、次のように語っている。

《これがあの時分の戦争の初めで、わたくしどもは江戸にいてその話を聞いても、あまりよい心持ちはいたしませんでございました》

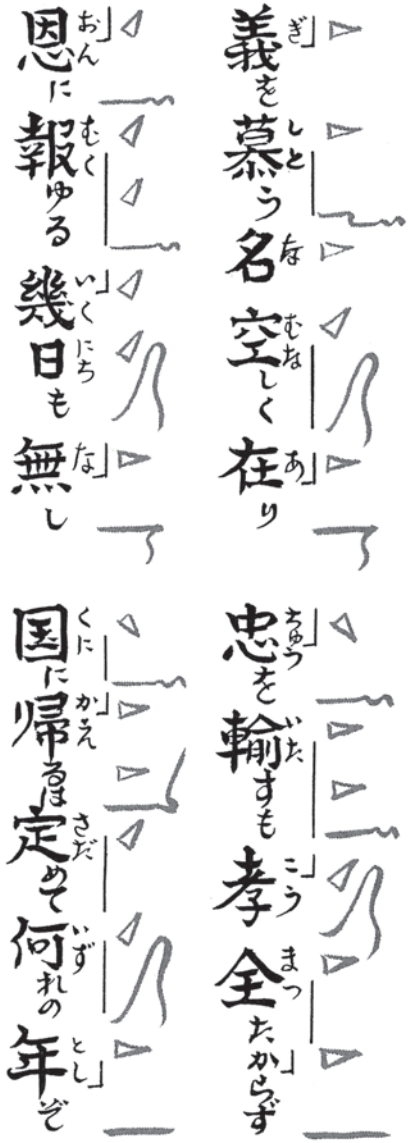
この文言が意味するところは、天狗党の乱を「一連の内乱の始まりと位置付けている」ことである。だが一般的には、天狗党の乱よりも11年前の、嘉永６年（１８５３）ペリー来航から15年で明治維新となったと理解されている。ところが、円朝を代表とする江戸っ子の民衆集合心理は、幕末維新動乱を天狗党の乱からだととらえている。それはなぜか。次号で。

# 漢詩研修（十七）

千代田岳精会　平井茂行

## 無題

阿倍の仲麻呂



義を慕う名空しく在り
恩に報ゆる幾日も無し

忠を輸すも孝全からず
国に帰るを定めて何れの年ぞ

慕義名空在　輸忠孝不全
報恩無幾日　帰国定何年

**【作者】**阿倍仲麻呂（文武天皇2年（６９８年）阿部船守の長男として大和国にうまれ、若くして学才を謳われた。霊亀3年・養老元年（７１７年）多治比県守が率いる第9次遣唐使に同行して唐の都・長安に留学する。同時の留学生には吉備真備や玄昉がいた。

唐の大学で学び科挙に合格し、唐の玄宗に仕える。神亀2年（７２５年）洛陽の司経局校書として任官、神亀5年（７２８年）左拾遺、天平3年（７３１年）左補闕と官職を重ねた。仲麻呂は唐の朝廷で主に文学畑の役職を務めたことから李白・王維・儲光羲ら数多くの唐詩人と親交していたらしく、『全唐詩』には彼に関する唐詩人の作品が現存している。

日本への帰国はかなえられることなく、宝亀元年（７７０年）1月に73歳の生涯を閉じた。

なお、『続日本史』に「わが朝の学生にして名を唐国に上げる者は、ただ大臣および朝衡の二人のみ」と賞されている。又死去の後、彼の家族が貧しく葬儀を十分に行えなかったため、日本国から遣族に絹と綿が贈られたという記述がのこっている。

**【通釈】**私は人が行うべき真の道理を求めこれまで励んできたが、今、私の名声だけがあり、私はむなしい気持ちです。遠く故郷を離れ、この唐の国に来て官史になっている私は、玄宗皇帝陛下に忠義を尽しているが、もう老いているであろう私の親に対しては何の孝行を尽くすことは出来ずにいる。

私も年を重ねているので、親の恩に報いたくてもそれが出来る日はもう幾日も残ってはいないのだ。

ああ、私が故郷、日本に帰ることができる日は果たして、何時のことであろうか⁉

# 「歴代天皇御製歌」（八十六）



## 「明治天皇」⑤

明治三十八年－一九〇五年－五十四歳

旅順開城。日露戦争終る。

○曉　曉のねざめのとこにおもふこと國と民とのうへのみにして

○草　うとましと思ふ葎はひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり

○歌　むらぎもの心のうちに思ふことひおほせたる時ぞうれしき

○歌　新しきふしはなくとも呉竹のすなほならなむ大和言の葉

○述懐　末つひにならざらめやは國のため民のためにとわが思ふこと

○誠　ひさかたのあめにのぼれるここちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

明治三十九年－一九〇六年－五十五歳

○秋夕　國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

○道　ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道

○射弓　梓弓ひきしぼりてもはなつ矢のまとをつらぬくおとのををしき

○孝　たらちねの親につかへてまめなるぞ人のまことのもとゐなるべき

○凱旋　外國（とつくに）にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらしをりにふれたる

○　ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のものがたりしつ

明治四十年－一九〇七年－五十六歳

○月　むかしいま思ひあつめてつくづくとふけゆく月をながめつるかな

○松　波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかためけむ

○歌　おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

○歌　こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞにほふ國のすがたも

○神祇　目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

明治四十一年－一九〇八年－五十七歳

○歌　まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり

○述懐　千萬（ちよろづ）の民の力をあつめなばいかなるわざもならむとぞおもふ

明治四十二年－一九〇九年－五十八歳

○柱　橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず（橿原のとおつみおや＝神武天皇）

○松　あらし吹く世にも動くな人ごころいはほにねざす松のごとくに

○義　おのが身はかへりみずして人のためつくすやひとのつとめなるらむ

# 土偶（4）

夏目勝弘

**動物の土偶**

イヌ形土製品、尾を立て口を大きく開き、獲物に向い吠えたてている最中。リアルな形に作ってある。

イヌは縄文人にとっては欠かせない家族の一員。狩りではイノシシに吠えかかり、人間を助ける。

見つかるイヌの骨には狩りで負ったと思われる傷の痕が多く見られる。その傷は治っているとか。

負傷した相棒を人は手厚く看病し、亡くなるまで共に暮らしていたらしい。

イヌと縄文人が同じ墓に埋葬されているケースもある。

**クマ形土製品**

縄文人も森の王者であるクマの土製品を作り、その力にあやかろうとしたのか。そして耳、尻尾、四肢が失われている、土偶の多くは、砕きて捨てる、動物も同じ理由なのか。

このクマもリアルにお尻の穴もしっかりと刻まれている。胸には三日月模様があり、ツキノワグマだったのか。

**イノシシ形土製品**

イノシシはたくさんの子どもを産むことから、多産の祈りを込めて作られたと思われる。

イノシシも左右の後ろ足と胴体とが別々の居住跡から見つかっている。これらに儀式の痕跡を見ることができる。

そうすることによって。バラまかれた家の住人が子宝に恵まれるように祈ったのかも。

縄文人はいかに子供を大切にしていたかがわかる。

現代の日本では悲しいが、子供への虐待、子殺し等のニュースの無い日がないくらいだ。

縄文時代が一万余年も続いたのは、子供をほんとうに宝として育てた証であると思う。

動物の土製品はこの外には、四つ足の人面獣が一つあるのみ。

命がけでのイノシシの狩りより、獲物の数も多いそして狩りのしやすいシカの土製品がないのも不思議でもある。

高カロリーな食卓、現代人の主食、コメと当時の主食、木の実のカロリーの比較。

100g当り、ごはん0・6杯は168キロカロリー、クリ、4・5個ゆでると169キロカロリー、生では164キロカロリー、クルミ16・6個674キロカロリー、

100g当りでは、コメとクリは同じぐらい、コメとクルミ4個と同じ。

当時の主要食糧のカロリー100gあたり

木の実クリ164キロカロリー、トチ161キロカロリー、山菜ワラビ21キロカロリー、ゼンマイ29キロカロリー、シカ肉110キロカロリー、イノシシ268キロカロリー、貝アサリ30キロカロリー、シジミ64キロカロリー

これを見ても、牧田善二医学博士の云われる、縄文人が食べていたようなものが、本当にヘルシーな和食だと。

オイシイの誘惑に負けてしまっているのが現代人であり、そしてダイエットを切望している。

この相反することは適うことはない。適えようとダイエットに関するあらゆることに手を出すがそれは無理なことであると思う。

またアレルギー体質の子供が多い、いつごろから多くなったのだろう。昭和の時代にはあまり聞かなかった。

袋物等を多く使用するためなのか、人工の物質がほとんどの食品に入っている。

# 「氷魚」のことから（206）

岡本八千代

今朝もまた斑雪が降っている。私の住んでいる西浦に雪の降るのは珍しいことなのに。

いよいよ平成三十年。今年からは、母屋には誰もいない。このムクゲ庵にくる私だけ。

由利先生からのお手紙によれば、「英国で漱石記念館を運営しておられた恒松郁生氏（漱石研究家）は大学を止められて、自宅で夏目漱石記念館を再開されるそうです。」とあった。また、「資料閲覧の要望も多く…」と、日経新聞記事にあった、とのことを知らせて下さった。実は私。寄贈したいものもあって心待ちしている。

とうとう子規と漱石の百五十年も去った。しかし、私の脳裡にはこの二人の人のことは永遠に離れないであろうと思う。大切な「木屑録」も「七草集」も出したりしまったりしていたが、また一応、本棚に終っておいた。

ところが、私の心の中には、二人の女性観はどうであったのか？と知りたいのである。

河東碧梧桐著の「子規を語る」（解説・平出隆）より、子規のロマンスについて探る。

△子規が七草集を書いた時のこと。

・子規は七草集を書く時、向島の桜餅屋の二階に立て籠って。自ら文藻を練ったという。

・当時の子規としては、不治の病体をかかえていながらも、友だちの露伴や紅葉、美妙斎、浪六等が世にもて囃されていたので、自分も成功を急ぐ焦燥にもかられていた。

・明治二十一年の夏、子規は、三並松友（良）、藤野古白（潔）と三人で、向嶋須崎村、長命寺境内の月香楼に寓し、二人の相次いで去った後も、なおここに留って筆を執った。二十一年末に漸く出来上がった。

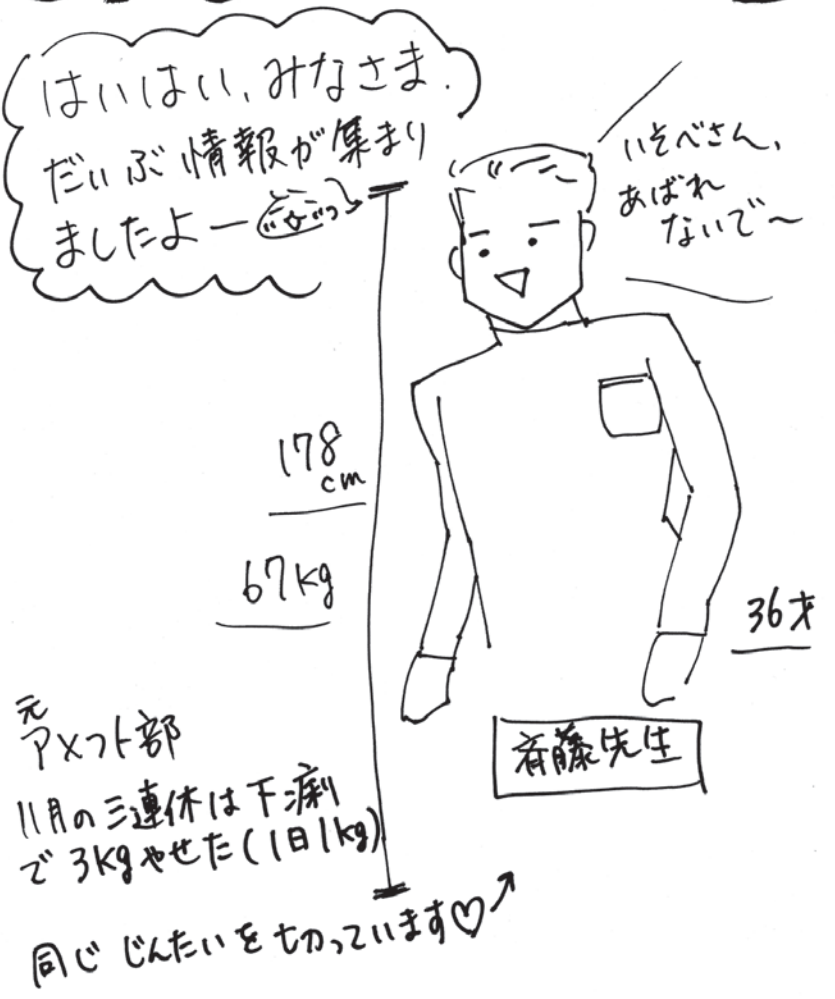
・そして、翌二十二年春になって、「瞿麦の巻」を草し、はじめて完きを得た。

・そこで、この七草集を書いた時に、そこの桜餅屋の娘と子規との間に、或るローマンスがあったのではないかという噂。しかし、河東碧梧桐はその著に言う。「晩年いろんな追懐談をして、かなり際どい処まで突っ込んだりしたけれども、このローマンスについては、遂に自らその一端にも子規は触れなかった。たしか子規生前であったと思う。五百木飄亭の案で、私達二、三人、向島長命寺内にあったその桜餅屋に行って、おろくと言ったその娘―当時は既に母になっていた―と話したことがあった。その女は、若さと花やかさの疾くに失なわれた伏目がちの瞼に刻まれていた。子規の話をしても羞恥を感ずる心の閃めきは、もうその瞳には見られなかった。――子規の唯一のローマンスも、内的に子規でなければならない心理の特殊性を帯びていない。」

やはり、子規は恋というものをほんとうに体験しなかったかもしれない。いや、あったかもしれないが、しなかったような子規の男らしい気性が私は好きだった。昔、中学生を相手の授業で子規を好きと言ったなあー。

磯辺　耐

# みなさまへ⑨


はいはい、みなさま。
だいぶ情報が集まりましたよー
いそべさん、あばれないでー
178cm
67kg
36才
斉藤先生
元アメフト部
11月の三連休は下痢で3kgやせた(1日1kg)
同じじんたいをもっています♡↗

# みなさまへ⑩

## 看護婦さんにあやまりたいこと

①

ベットの間に
ナースコールはさん
じゃって、何度も
呼んでごめんなさい。

②

何度も装具、
つけ忘れちゃって
ごめんなさい。

③


いつも何でも聞いてしまって
ごめんなさい。

アイスノンを勝手に冷蔵庫で
冷やしてごめんなさい。うちのおかー
さんが面会時間を守らなくてごめん
なさい。いつもオカズを一品、増やして
食べてごめんなさい…

## 編集室だより【二〇一八年一月】

○二〇一七年度の「三河アララギ誌」を無事発送し終えたことに感謝。二〇一八年度を続けさせていただきます。

○浅草寺に初詣。浅草駅に降りたつと、限りなく大勢の人人。何をするも、まず定まっている行列に着かないといけない。いつまでたっても本殿には行きつかない。あきらめているうちに…それでも初詣が出来た。

○インフルエンザ菌が蔓延しているようだ。俳句会も、忘年会もキャンセルになる。おとなしく家に居よう。

○代官山の「スペースＯＤＤ」。ニューヨークからやってきた「ポピーちゃん」のステージを見聞。同じ〝人間〟とも思われないほど「奇麗で、可憐なポピーちゃん」の歌声が東京に満つ。

○府中・武蔵総社、大國魂神社へ吟行。大國魂大神を武蔵の国の護り神と。出雲の大国主神と同神。創立は景行天皇、西暦一一一年。武蔵国を開かれ、衣食住の道、医療法、まじないの術などを授けられた。
神社六社が合祀されていて、それぞれの所宮に、それぞれの狛犬が、それぞれのルーツを伝えている。
原点と思われる狛犬達の、そのままの姿に魅せられて、私の心の中心にいる狛犬達です。

○雪が降る…積るだろう…天気予報は忙しく報じているけれど、仏像彫刻のクラスに出掛けた。
仏様と向い合っていて、気がつかないでいるうちに、雪が積りはじめていた。
この日のクラス後に二〇一八年度の新年会をすることになっていて、品川にあるレストランに向う。
雪は風を伴って、ケータイに「はやく帰路につくよう」呼びかける警報が入る。
東京中の人が、同時に帰宅を開始し、バス停なり、駅なりへ向かう。駅は人があふれ、駅へも、ホームへも入りきれない。はみだした人が、風雪にまみれて行列をする。
私達は帰るのを止め、新年会場で、ゆっくり、美味しく、楽しく過した。
雪は積もり、足が埋まるほどになっていたがさき程までの人達は姿を消し、普通に電車に乗った。
私の家は、昔の権現山の頂上にあり、坂が心配だったけれど、積ったばかりの雪は、足をしっかり固定してくれて楽勝。坂の途中「インスタ映え！」とスキーをして写真をとりあっている若者達がいた。

○雪が融けるまで外には出ない。昔（?）は、この坂、目覚めると雪掻きされていたなあ。

## 野菜・まんだら　　（1）蕎麦

○タデ科、そば属、一年草
○原産、東アジア、ヒマラヤ…
○渡来は、稲と同様と思われる。
○高知県内で9000年以上前の遺跡からそばの花粉みつかる。
○そばの歴史的文献、767年に完成した「続日本記」に、女帝元正天皇の救荒作物に栽培が奨励されたことが記されている。
○開花時期、６月中旬～８月中旬に収穫される夏そばと、９月中旬～ 11月中旬に収穫される秋そばと。一般的に秋そばを新そばという。
○そば粉　そば殻を砕いて取り除き、胚乳部を粉砕して３段階にふるい分ける。ふるい分けられた順に一番粉、二番粉、三番粉とよばれ、一番粉が最も胚乳分が多い。
○そば米　製粉せず殻だけ除いたものは、そば米、むきそばと呼ばれ、雑炊などにする。
○そばの芽　そばの種を発芽させ、やわらかい時期に食す。
○ルチン　毛細血管の弾力性を保つ働きの「ルチン」に富み、ビタミン群や無機質が豊富。

○信州へ、新そばを食す機会があった。蕎麦店の玄関に白い花咲くそばがひともと。新そばをつまみに、地酒をいただいた。最後の「そば雑炊」は、目に、心に、身体に、天然自然のやさしさ、美味しさを教えるのでした。

森岡・今泉

◇三河アララギ　２０１８年３月号　第65巻　第３号

２０１８年３月１日発行
発行人　今泉由利
編集　今泉由利　森岡陽子
制作　三河アララギ発行所
〒１１４－００２２
東京都北区王子本町１－26－６Ａ
ＴＥＬ０３－５９２４－２０６５
http://imaizumiyuri.jp/
E-mail yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
発行所　株式会社風詠社
〒５５３－０００１
大阪市福島区海老江５－２－７－４０２
ＴＥＬ０６－６１３６－８６５７
発売元　株式会社星雲社
〒１１２－０００５
東京都文京区水道１－３－30
ＴＥＬ０３－３８６８－３２７５
印刷所　株式会社桜創美
©三河アララギ発行所２０１８

ISBN978-4-434-24429-2
C0092 ¥800E

定価：本体800円＋税
発行 風詠社　発売 星雲社

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌は、毎月発行します。

◇新規購読を希望される方。
三河アララギ発行所まで申し込み下さい。
一ヶ年五千円。
振替口座００８３０－６－５６２２９

◇短歌・俳句・論文・随筆など、送稿いただけます。

◇原稿送付先
〒一一四－〇〇二二
東京都北区王子本町一－二六－六Ａ
今泉由利宛

◇原稿は原稿用紙・もしくはメールでお届け下さい。

◇四月号への原稿は、二月二十八日（水）着にてお届け下さい。毎月、月末日です。

◇郵便料金の都合上、返却原稿は出来ません。
コピーを残されるとか、個々のご対応をお願い致します。